



sousei akita

曹 青 秋 田

秋田名「佛」 ～第2教区・東傳寺様の持国天(黒木淳祐師・筆)～



会長インタビュー

——宜しくお願い致します。就任されてから一年が経ちましたが、振り返って見て如何でしたか？

「実感として、『早いなあ』というのが正直なところです。私自身への問いから出発し、設定させて頂いた『出家を問う』というテーマが、今期の事業として会員皆様に無理を強いたのでは、と不安な部分もあります。それでも会員諸師には、自分達の問題意識として持つてほしい」と願っています。事業が契機となつて、一人一人が『出家を問う』ことで、個々の活動や捉え方に、これまで考えていなかった意識が生まれてきたら、それで良かったと思つています。今期の初年度は、弁道会に始まり、九州北部並びに秋田県豪雨災害復興支援鉢、祈りの集い、随聞会として一日接心会——と各行事を行わせて頂きました。

災害はいつでもどこどのように起きるか誰にも分かりませんが、予想もしない事が起きた時、我々ほどのよ

(聞き手・佐々木耕志)



うに取り組むのか(決して「対処」ではありません)、そして何が出来るのかを模索し続けること自体、とても大事なことだと思えます。七月に起きた秋田県豪雨災害における復興ボランティアは、自分達で考え、被災された住宅に計五回にわたつて起きました。困つていの方々の所へ直接足を運ぶ重要性を痛感したところです。《即座に》行動に移せたことは良かったです。手伝わせて頂いて有難かつた」と実感しました。

前後して支援鉢を行いました。県内各所において、出発起点となる御寺院様の御協力を得て、復

興を祈りつつ浄財を募りました。快く鉢行の会場を提供して下さいました各御寺院様には、厚く感謝申し上げます。《思いを行動に移す》に当たり、(秋田市の副住&随身の会である)協会の御協力を得ました。さらに岩手県曹洞宗青年会の方々にも御随喜頂きました。《行》の大事さを改めて噛み締めさせて頂いた鉢でありました。

十月には北秋田市合川・正法院様を会場に《祈りの集い》を開催致しました。事前に《グリーンケア》——心構えを学びました。大切な人を亡くされた方々に、どう寄り添うべきか。我々宗侶にとつては、日常の行いである筈ですが、参加した一人一人が、改めて他者の悲しみに真摯に向き合った尊い機会でした。法要自体も、普段の《供養》というスタンスとは異なり、《祈り》を深化させた形を自分達で考え、修行させて頂きました。参列者からも、自分達も祈りに参加しているのが実感でき、感銘を受けた」とのお声を頂きました。寄り添い、祈る行為がいかに大事か、再確認したところです。」

——《出家を問う》というテーマ

に関して、御自身が在家から佛道に入られたと伺っております。宜しければ経緯をお聞かせ下さい。

「広報の就任挨拶にも記したとおり、私は身内に宗門寺院関係者が一人もいない中、佛縁を頂戴しました。正直にいうと、当初は世間一般のイメージする、厳しい修行、自体への興味でした。当時は大学受験に失敗して浪人中で、もう一度大学を受験すべきか、迷っていました。その頃に師匠と話す機会があり、修行をするには佛門に入らなければならない」と聞かされました。以前から興味を持つていたので、心を強く驚掴みにされたのです。まだ何者でもない自分であり、何か目の前の現実を大きく変えたい……という思いもあつたかも知れません。話したのが三月で、大本山永平寺の春安居志願者受付が締め切られる直前でした。即座に、修行してみたいです」と返事をしました。早速得度させて頂き、永平寺に上山しました。

念願の修行を始めたはいいものの、世間一般のイメージで修行を理想化していた私にとって、実際の安居に、こんな筈ではなかった」とショックを受ける日々が続きました

た(師匠、申し訳ございません...)。そんな中、福井の宝慶寺や鹿兒島・紹隆寺などの外寮舎に転役(※注)し、信者さんや地域の方々と接する機会が多くなりました。そこでいろいろ話していると、「じゃあ君はどうして坊さんになったの?」と何度となく尋ねられるのです。「なぜ皆は、坊さんになった理由を知りたがるんだろう」と思ううち、そもそも自分は、なぜ出家したんだろう」と改めて問うてみたのです。そして、「自分が出家した事は、実は社会にとっても大きな意味があるのでは?」と考えるようになりました。「個人の身の振り方」に収束させてしまえばそれまでですが、「彼はこういう理由で坊さんになったんだ」と相手の記憶に残る事で、間接的であれ、社会に影響を与えていくと思うのです。だから《出家を問》い続ける事は、我々のみならず、社会にとって大事だと思っています。そういう視点で捉えればこそ、自ら選んだ僧侶という生き方に誇りを持てるし、身を擲つことが出来るのではないでしようか。」

「縁あって会長職を拝命し、在任期間中に節目の大役を仰せつかりました。偶然の廻り合わせではありますが、その廻り合わせ自体は必然だったのではないかと思いますが、大きな意味があります。現在四十一歳の私が秋曹青の四十年間を思う時、その歳月の積み重ねと先輩達の奮闘・努力に、畏敬の念を覚えます。この節目に記念事業を執り行なうのは非常に有難いことです。先輩達の切り開いてくれた道を現会員の我々が受け継ぎ、未来に伝えていくためにも、全会員の《和合力》を表現できる事業にしたいです。」

「——四十周年にあたって、各部会・一般会員にはどのような気持ちで臨んでほしいでしょうか?」

「『出会うべくして出会った』必然性を、そして《一期一会》を感じて、事業に参加してほしいです。この節目は勿論のこと、共に参加する仲間達にこの節目に出会えたのも、私は必然だったと思います。四十年間の来し方の重みを十二分に感じつつ、《我々が》未来を見据え、繋げていくんだという思いを持ってほしい。」

「十、二十、三十、四十...」と並べ

れば数字に過ぎませんが、会員それぞれが《四十周年》に今立ち会っている意味を、先輩の思いを感じつつ、自分なりに見出してほしいのです。「自身への問い」という点では、今期のテーマ《出家を問う》と同じです。

我々僧侶は、社会的には職業として税金を納め、給与も受け取りますが、まず何よりも《生き方》として選んだ筈です。退職はありません。その意味を、倦まず弛まず常に考え続けていかなければいけないと思います。そうして考え続けた意味は、困難の際、自分を奮い立たせてくれると共に、生きていく力になると信じています。」

「——得度から安居中の自らへの問いかけ、そして四十周年に賭ける思いまで、幅広くお聞かせ頂きました。本日はお忙しいところ、有難うございました。」

※注:「寮舎」は部署、「転役」は異動の意。永平寺では他にも「吉峰寺」「名古屋別院」などの外寮舎がある。

祈りの集い

今世後世の安楽を願って

第三教区 慶祥寺徒弟 矢萩宗淳



黄金色に輝く稲穂の収穫が真つ盛りの十月十四日、北秋田市鎌沢の正法院様を会場に、第九回「祈りの集い」並びに、月宗寺御住職・袴田俊英老師を講師にお招きし、「住職学研修」が開催されました。

本年度は「大切な方を亡くされた全ての方とともに」と題し、大佛殿・丈六延命地藏菩薩像の下、二十二名の参加者にて「佛説延命地藏菩薩経」と「地藏歎偈」を誦誦し、梅花流詠讃歌

を唱え、故人の菩提の圓滿ならんことを切に祈りました。

また寂寥のなか、合掌焼香下さった参加者の方々にとって僅かばかりの安寧の時になればと願い、淹れ立てのコーヒーやお菓子を持ち寄り、茶話を催しました。お一人お一人の言葉に耳を傾け、共に切なる思いに寄り添う時間を持つことが、この活動の要略です。

当日は天候にも恵まれ、正法院様の美しい庭園と穏やかなる池の水面の揺らぎが、更なる一助となりました。

この「集い」に先立つ四日には、秋田グリーンケア研究会代表の涌井真弓先生から、『傾聴』のための事前学習を受けました。「グリーンフ」とは親しい人との別れから生じる深い悲しみや喪失感等が及ぼす、身体上・精神上の強い反応を指します。

「グリーンフ」は四種類に分類されます。第一に、失語や胸・頭に痛みを感じる身体的反応。第二に、自らを責めたり不安から来る敵意・他者依存・生きる意志の希薄化など、人生感を歪めてしまうほどの心理的反応。第三に、それに伴って平常の日常生活に支障を来す社会的反応。第四に、これまでの自分の過去や己の人生の意義・尊厳性を見失う程の自暴自棄に陥る苦痛——となります。

これらの辛い体験は言語を絶するものであり、他者と対話することで喪失感の緩和を試みても、周囲の身構えや言動時には心ない励ましによって、より深く傷つけられることが有り得ます。

時として心が折れる程の悲愴感を抱くことがあつたとしても、人はそれぞれに毎日毎日を懸命に生きております。頼みとする寄る辺が儂きとき、諸佛の慈悲の灯りが一隅を照らして下さることを願わずにはおられませんでした。

茶話会においては、悲しみを決して比べない事・相手の沈黙や言葉と言葉の間を尊重する事・守秘義務を遵守する事等の約束事を確認し、喫茶の滋味が参加者の内面に温かな和らぎをお届け出来るようにと祈り、一期一会の時間を厳粛に過ごしました。

大切な方を不意に亡くされた遺族にとって、その死は何よりも辛く、哀しみに満ち満ちております。どんなに会いたいと願うとも、どんなに伝えたいと願おうとも、決して叶わぬ別離の淋しさと悲哀の大きさに心が締めつけられるようでした。

自死は、心の内側に自らを亡くしてしまうほどの、あるいは立ち直れないほどの絶望感や苦悶葛藤を抱え、精神が圧殺されてしまう病であるとい

う認識を持つことが必要です。

故人の尊厳を守り、そして遺族が辛さと悲哀の中に在っても生きることを見つめるとき、困惑を生むような「一面的に偏った見解」を払拭し、寄り添い、支え合う社会の在り方を模索し続けていかねばなりません。

私にとってこの度の「祈りの集い」は、誰にも話すことができなかった心の奥底を、互いに安心して分かち合うことができるよう環境を整え、声にならぬ声を「傾聴」する必要性を、身に沁みて学ぶ契機となりました。

人と人の結びつきは人間社会の礎であり、身心共に健康で安らかであることは、人生を歩む大前提となります。そして本当に辛く寂しい思いの中で、人は改めて自己に繋がる縁の大切さに気付かされるのではないのでしょうか。

袴田老師は御法話の中で、彼岸と此岸の繋がりを繰り返し説いて下さいました。亡くなられた最愛の方へ思いを馳せるとき、遺族はその姿を求め、今一度苦楽を共にしたいと心から念じ両手を合わせます。

その時、彼岸に渡られた方々もきつと同じく此岸の私達を思い、慈しみと同感の心を込めて、両手を合わせて下さっているに違いありません。

せん。

月とそれを映す水面が和合するように、眼前の合掌は私一人の合掌ではなく、佛となった故人が現世を生きる私たちの幸せを祈る姿に重なり、通じ合うと思えます。

供養の念と神佛の御加護が交錯し、故人と遺族が一つに繋がることを祈りつつ、佛が宿る右手と我を乗せる左手が、感応同交に合わさる合掌の内、佛心を念じ続けたいと存じます。



東日本大震災物故者 追悼法要随喜報告

二教区 東泉寺副住職 柴田和明



東日本大震災より七年、これまでの「三月十一日」の中ではもっとも穏やかな天候であった。伽藍を津波に流され、高台に再建された岩手県釜石市鶴住居の常楽寺様にて、追悼法要が営まれた。藤原住職を導師に檀信徒、県内外の宗侶（秋田曹青から三名）が仏徳を仰ぎ、震災物故者の鎮魂と、遺族や地域住民の安寧を願い、ともに祈りを捧げた。

法要後、檀信徒にずっと寄り添い続けてこられたであろう住職が随喜した我々に仰ったことには「昨年の七回忌で少し心の区切りが良かったのか、今年は檀信徒の表情が柔らいできたようだ」と。参列



された方々がこの法要の場での表情を湛えられるようになるまでには、今日までの歳月をどのような思いを胸に抱いて歩んでこられたことだろう。そのかすかな表情の違いを読み取られた住職御夫妻と檀信徒との間には、長年に亘る細やかな交流と信頼関係が感じられた。翻って私は一僧侶として、檀信徒と真摯に向き合っているのだろうか：とも省みる。

三陸の海を見渡せる境内の梵鐘には、『一念一鐘』『平和・慰霊・復興を祈念し、打鐘一拜を願います。』の文字。秋田曹青の仲間と鐘を撞



き、手を合わせた。変化してゆく一方、未だ多くの行方不明者がいる現実もある。震災後は多くの寺院が避難所になった。日々の勤行、あるいは現地に赴き、被災地に思いを寄せ続けることと同様に、我々の地元への防災意識を高めていくことも、東日本大震災の教訓を伝えていくことや風化させないことに繋がるの

随 聞 会

今回の随聞会は二月二十二日、「一日摂心―坐禅は出家の姿―」と題して開催された。講師は曹洞宗国際センター所長・藤田一昭老師である。老師の著『坐禅読本―身心の調う道―』を事前に予習したが、その内容を既に目から鱗の落ちる思いで読んだ。どのような講義が受けられるか、楽しみにして当日に臨んだ。

冒頭、〃人間杭ワーク〃と銘打ち、二人一組になって体を伸ばして解きほぐす。人体の構造を綿密に分析して考え出されたものと分かる。講義が始まり、「坐禅の起源である釈尊の成道までの過程をもっと徹底して知るべき」との言葉。〃とつくに知ってる〃と思つたのも束の間、有名な逸話の背景を掘り下げ、事、なぜ釈尊が菩提樹下の打坐に至ったかが明確になる。自分が《個々の逸話を覚えていて》程度だった事に気付かされた。師は更に問う、「典座は料理人ではない。《人參を切る》という行為は同じだが、典座のそれを修行たらしめているものは何か?」―そのまま坐禅にも繋がる問いである。「外界に対して自分を《開き》、あるがままの自分

を受け入れるのが坐禅」意識とは、真つ暗な部屋の中で懐中電灯を当てた部分のようなもの。他はどんな様子か、どれくらい広い広さかも分からない、いわば《自閉状態》。意識できない部分に目を向けるのが佛教。《快樂でも苦行でもない道》。《左にも右にも傾かない、前にも後ろにも偏らない》―決して〃ここだ〃とは言っていない。自分で見つける。それが自灯明―師の言葉のほんの一部だが、僧堂安居中に拝聴できていれば：と悔やむばかりである。

間にまたボディワークが挟まれる。左右の指紋同士を意識してピツタリと合掌すると、両腕を引っ張られてもなかなか引き剥がされない。また、二人一組になって筋肉や関節をリラククスさせていく。私は幸運にも老師と組んで体感できた。姿勢を正す時、背骨ばかりを意識しがちだが、むしろ内臓を中心に考えるべき―背中まっすぐより、お腹まっすぐ―と気付かされた。質疑応答の際、「坐禅を深く掘り下げ」るのを、難しいから、と避けてきた結果、宗門が今の体たらくなのでは?―宗門を、私自身に置き換えればピツタリ当て嵌まる現実を思い知らされた。

「今日はあくまでも、補修」。本

当の坐禅は、皆さんがそれぞれ実践していった下さい」と老師はおっしゃっていたが、私はむしろ、必修科目と表現したい。今回は新たな事柄を学んだのではない。宗侶なら誰もが持つ知識や経験を深く掘り下げ、いかに重要か《気付かせて》頂いた。同時に、それが当たり前過ぎるが故に難しいという事実も思い知らされた。師の言葉を借りれば「面白かった映画を人に勧めるように」、自分も坐禅を実践し、有縁の人々に伝えていきたいと思う。

(佐々木耕志 記)



活動紹介

第九教区 松庵寺副住職

渡邊英心師

今回は松庵寺副住職を務めながら、バンド「英心&The Meditatonalies」でミュージシャンとしても活動をしている渡邊英心師にお話を伺いました。

簡単なプロフィールを教えてください。

一九八五年三種町生まれです。東京学芸大学を卒業後、永平寺に安居し、下山後は新宿区四谷の東長寺で二年間お勤めをさせていただきました。その後、ブラジルのサンパウロにある佛心寺に一年間在籍しました。その後帰郷し現在にいたります。

いつから音楽活動を始めたのですか？

中学生の時からロックバンドのコピーをやり始め、高校でも続けていました。その後、大学在籍時にサンバサークルでラテンパーカッションを始め、その中でブラジル音楽やキューバ音楽、ジャマイカ

のレゲエに触れてラテン音楽に出会いました。

現在までのバンド活動についてお聞きします。

東長寺でのお勤めを辞した時くらいから、「コロリダス」というラテンバンドを都内で始めるようになりまして。その後すぐブラジルに行っていました。その後も帰国後また「コロリダス」の活動を東京で継続しながら、秋田に住んでいました。秋田から東京へ通う日々があったわけです。そんな中で、秋田で音楽をやりたいな…というところで、自分で曲を作るようになって：それがレゲエバンドという形になり、現在に至っています。

なぜ秋田で音楽活動をしようにと思ったんですか？

「暇だった」というのがきっかけの一つです。最初に作った曲が「秋田濃厚民族」という曲なんです。当時国民文化祭で秋田を盛り上げようという気運が高まっていた時に、あんまりテーマソングとか：秋田を美しく見せようとする動きがすごく強かったことに違和感のようなものがあった：…もともと僕は、秋田に

対してポジティブなイメージを持っていないで、それを美化というか賛美するっていう曲は、ここに住んでいる人間からすると違和感があるという事で、生活に根差した辛いことから目をそらさないような、地に足の着いた歌でも作ってみたいかな…という気持ちで書きました。

その頃はまだMeditationalsを組んでいないんですけど、その曲でYouTubeに載せたりしたら割と評判が良かったので、「じゃあ、また何曲か作って秋田でバンドを組んだら楽しそうだな」という経緯ですね。

アルバム収録曲中に、「三宝御和讃」や舍利礼文の一節を聴き取ることができそうですが、宗門僧侶として、それを意識しながら作詞作曲をすることはありますか？

もちろんですね。常に仏教的な意識というかフィルターを通して歌詞を書いているので。まあ後付けの場合もあるのですが、何かこう：…仏教的なテーマを持たせてストーリーを作っているの。例えば、「秋田濃厚民族」であれば「知足」であったり、他の曲であれば「悟り」であったり、「空」であったり。禅の話でよく「肉屋の前

で悟った」とか「竹のたたく音で悟った」というような話があるじゃないですか。「靴にじゃがいも」という曲はそれと似たような感じで、子供が靴にじゃがいもを入れて悟ったっていうバージョンです。

ライブが出来る場所や他の御寺院で、ライブや演奏をすることはありますか？

ありますよ。曹洞宗の御寺院様だけでなく、他宗の御寺院様でも開催した事があります。

昨夏私も見に行かせていただいた、「松庵寺郷土祭り」についてお聞かせください。

「松庵寺郷土祭り」は、去年で五回目です。基本的には秋田の方達でやります。「コロリダス」とか「Meditationals」とか、そういう方達をメインのアクトに置いて、地元密着型でやろうと思って始めたお祭りです。限られた予算の中でやりますが、昨年は五回目ということで、いつもより力を入れて「あんなべいいな」で皆様に耳馴染みもある青谷明日香さんと呼んで開催しました。SNS上で情報を発信した

り、町の広報に載せていただいたり、商工会の方々とも連携し境内の出店も増やしたところ、今までで一番の集客がありました。

「これからどんな活動をしていきたいと思っていますか？」

今セカンドアルバムの制作中なんですけれども、夏前位の発売を目標に頑張っています。

僕も子供が生まれ、自分を取り巻く環境は変わってくると思いますが、状況に応じて、自分に出来る事ややっていこうという気持ちがあります。音楽活動は、期待してくる人がいる限り続けたいなと思っています。「松庵寺郷土祭り」もお寺の恒例行事として、地域のお楽しみ行事として定着させたいと考えています。

「今日はご多用のところ、快く取材をお受けいただき、どうもありがとうございました。」

(聞き手・戸澤 広悦)

英心 & The Meditationalies

1stアルバム
「からっぽ」

1. Natty Skinhead
2. 迷想
3. お香を焚こう
4. 靴にじゃがいも
5. 君とダンス
6. 僕らのお盆～新盆編～
7. 秋田濃厚民族
8. お山コ三里
9. UNITY
10. からっぽ
11. I DUB AKITA

各種お問い合わせ先

eishinwatanabe@gmail.com

ホームページ

<http://eishinwatanabe.wixsite.com/meditationalies>

YouTubeは「英心」で検索すれば、様々な動画視聴可能!



松庵寺郷土祭り

平成29年 8月5日 15時 開場時間～20時 終了
松庵寺境内にて (清沢町4丁目 三郷町松庵寺境内)

出演

15:00～15:15	松庵寺郷土祭り実行委員会
15:30～16:00	八景園楽隊
17:00～17:30	音楽部
18:00～18:30	松庵寺郷土祭り実行委員会
18:30～19:25	英心 & The Meditationalies
19:30～19:50	松庵寺郷土祭り実行委員会

入場無料 (寄付制)

曹青秋田／第84号

発行／秋田県曹洞宗青年会

事務局／鹿角市花輪字上花輪13

長年寺内

発行責任者／菅原芳徳

編集責任者／戸澤広悦

秋曹青ホームページ

<http://www.sousei-akita.net/>